

# 経理の状況

## 1 直近の2事業年度における計算書類

保険業法第111条第1項の規定にもとづき公衆の縦覧に供する書類のうち、貸借対照表、損益計算書等については、商法特例法による中央青山監査法人の監査を受けています。

### (1) 貸借対照表

(資産の部)

(単位：百万円)

科目	平成15年度 (平成16年3月31日現在)		平成16年度 (平成17年3月31日現在)	
	金額	構成比(%)	金額	構成比(%)
現金及び預貯金	44,066	5.8	28,470	3.5
現金	0		-	
預貯金	44,066		28,470	
コールローン	-		15,000	1.9
買入金銭債権	10,994	1.4	6,297	0.8
金銭の信託	11,794	1.5	9,173	1.1
有価証券	682,285	89.6	734,046	91.3
国債	204,373		256,145	
地方債	21,453		17,940	
社債	323,201		287,238	
外国証券	128,293		166,320	
その他の証券	4,963		6,401	
不動産及び動産	48	0.0	48	0.0
建物	43		45	
動産	4		3	
その他資産	12,363	1.6	11,241	1.4
再保険貸	6,890		8,032	
未収金	271		109	
未収収益	2,159		2,419	
預託金	54		52	
仮払金	105		176	
金融派生商品	2,876		448	
その他の資産	3		3	
繰延税金資産	42	0.0	54	0.0
資産の部合計	761,594	100.0	804,333	100.0

(負債の部)

(単位：百万円)

科目	平成15年度 (平成16年3月31日現在)		平成16年度 (平成17年3月31日現在)	
	金額	構成比(%)	金額	構成比(%)
保険契約準備金	413,296	54.3	433,681	53.9
支払準備金	327		17,878	
責任準備金	412,968		415,802	
受託金	334,215	43.9	354,483	44.1
その他負債	5,426	0.7	9,036	1.1
再保険借	4,510		4,920	
未払法人税等	91		99	
預り金	2		2	
未払金	705		746	
仮受金	0		7	
金融派生商品	118		3,259	
退職給付引当金	64	0.0	72	0.0
賞与引当金	12	0.0	13	0.0
価格変動準備金	0	0.0	0	0.0
地震保険評価差額金	7,000	0.9	5,458	0.7
負債の部合計	760,015	99.8	802,746	99.8

(資本の部)

(単位：百万円)

科目	平成15年度 (平成16年3月31日現在)		平成16年度 (平成17年3月31日現在)	
	金額	構成比(%)	金額	構成比(%)
資本金	1,000	0.1	1,000	0.1
利益剰余金	570	0.1	580	0.1
利益準備金	1		1	
任意積立金	56		56	
(特別積立金)	(17)		(17)	
(価格変動特別積立金)	(39)		(39)	
当期末処分利益	512		522	
(当期純利益)	(17)		(10)	
株式等評価差額金	14	0.0	11	0.0
自己株式	△5	0.0	△5	0.0
資本の部合計	1,579	0.2	1,587	0.2
負債及び資本の部合計	761,594	100.0	804,333	100.0

## 平成16年度の注記事項

1. 有価証券の評価基準、評価方法及び表示方法
  - (1) その他有価証券のうち時価のあるものの評価は、期末日の市場価格等に基づく時価法により行っています。
  - (2) その他有価証券のうち時価のないものの評価は、移動平均法に基づく原価法又は償却原価法により行っています。
  - (3) 地震保険の責任準備金及び地震保険に係る受託金に対応する資産の評価差額は「地震保険評価差額金」として表示していますが、それ以外の評価差額については全部資本直入法により処理しています。また、売却原価の算定は移動平均法に基づいています。
2. 金銭の信託の評価基準及び評価方法
 

運用目的及び満期保有目的のいずれにも該当しない有価証券の保有を目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、その他有価証券と同じ方法により行っています。
3. デリバティブ取引の評価は、時価法により行っています。
4. 不動産及び動産の減価償却は定率法により行っています。
5. 引当金の計上基準
  - (1) 貸倒引当金
 

債権の貸倒れによる損失に備えるため、資産の自己査定基準及び償却・引当基準に基づき、次のとおり計上しています。

破産、特別清算、手形交換所における取引停止処分等、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している債務者に対する債権および実質的に経営破綻に陥っている債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収が可能と認められる額等を控除し、その残額を引き当てることとしています。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績等から算出した貸倒実績率を債権額に乗じた額を計上しています。

また、全ての債権は資産の自己査定基準に基づき財務部が資産査定を実施し、当該部署から独立した管理部が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の計上を行っています。なお、当期は引当の対象となる資産がないため計上を行っていません。
  - (2) 退職給付引当金
 

従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しています。なお、退職給付債務は、自己都合退職による期末要支給額を基に計算する簡便法により算出しています。
  - (3) 賞与引当金
 

賞与引当金は、従業員の賞与に充てるため、支給見込額基準により算出しています。
  - (4) 価格変動準備金
 

価格変動準備金は株式等の価格変動による損失に備えるため、保険業法第115条の規定に基づき計上しています。
6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算は、外貨建取引等会計処理基準を適用しています。
7. 消費税等の会計処理は税抜方式によっています。
8. 責任準備金に係る繰延税金資産については、当社は地震保険の単種目を扱っており、巨額の保険金支払を想定した場合、その回収の確実性を見込むことができないため、計上していません。このため、責任準備金については、法人税等相当額を控除した上で繰入又は取崩しています。
9. リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっています。
10. 不動産及び動産の減価償却累計額は、65百万円です。
11. 貸借対照表に計上した動産のほか、電子計算機等の一部についてはリース契約により使用しています。
12. 保険業法施行規則第17条の3第1項第3号に規定する純資産の額は、11百万円です。
13. 繰延税金資産の総額は61百万円、繰延税金負債の総額は6百万円です。繰延税金資産の発生の子な原因別の内訳は、未払事業税32百万円、退職給付引当金24百万円、賞与引当金4百万円です。繰延税金負債の発生の子な原因別の内訳は、その他有価証券に係る評価差額金6百万円です。
14. 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しています。

## (2) 損益計算書

(単位：百万円)

科目	年度	平成15年度 (平成15年4月1日から 平成16年3月31日まで)	平成16年度 (平成16年4月1日から 平成17年3月31日まで)
		金額	金額
経常 損益 の 部	経常収益	66,352	71,856
	保険引受収益	54,678	61,995
	正味収入保険料	50,896	58,198
	積立保険料等運用益	3,781	3,796
	資産運用収益	11,660	9,860
	利息及び配当金収入	9,271	9,240
	金銭の信託運用益	284	79
	有価証券売却益	172	41
	金融派生商品収益	5,632	-
	為替差益	-	4,208
	その他運用収益	80	86
	積立保険料等運用益振替	△3,781	△3,796
	その他経常収益	13	1
	経常費用	66,167	71,758
	保険引受費用	54,097	61,515
	正味支払保険金	9,682	15,987
	損害調査費	743	739
	諸手数料及び集金費	21,918	24,403
	支払備金繰入額	266	17,550
責任準備金繰入額	21,485	2,834	
資産運用費用	7,508	5,753	
有価証券売却損	143	231	
有価証券償還損	-	17	
金融派生商品費用	-	5,503	
為替差損	7,361	-	
その他運用費用	2	0	
営業費及び一般管理費	839	855	
その他経常費用	3,722	3,634	
支払利息	3,722	3,634	
経常利益	184	98	
特別 損益 の 部	特別利益	-	0
	価格変動準備金戻入額	-	0
	特別損失	0	2
	不動産動産処分損	0	2
	価格変動準備金繰入額	0	-
税引前当期純利益	184	96	
法人税及び住民税	172	96	
法人税等調整額	△6	△10	
当期純利益	17	10	
前期繰越利益	494	512	
当期未処分利益	512	522	

## 平成16年度の注記事項

- 正味収入保険料の内訳は次のとおりです。

収入保険料	117,942百万円
支払再保険料	59,744百万円
差引	58,198百万円
- 正味支払保険金の内訳は次のとおりです。

支払保険金	15,987百万円
差引	15,987百万円
- 諸手数料及び集金費の内訳は次のとおりです。

受再保険手数料	24,403百万円
差引	24,403百万円
- 利息及び配当金収入の内訳は次のとおりです。

預貯金利息	85百万円
コールローン利息	0百万円
買入金銭債権利息	14百万円
有価証券利息	9,140百万円
計	9,240百万円
- 金融派生商品費用中の評価損益は2,811百万円の損です。
- 1株当たりの当期純利益は、5円30銭です。算定上の基礎である当期純利益は10百万円、普通株式に係る当期純利益は10百万円、普通株式の期中平均株式数は1,988千株です。
- 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しています。

(3) キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

科目	年度	平成15年度 (平成15年4月1日から 平成16年3月31日まで)	平成16年度 (平成16年4月1日から 平成17年3月31日まで)
		金額	金額
<b>I. 営業活動によるキャッシュ・フロー</b>			
税引前当期純利益		184	96
減価償却費		5	5
支払備金の増加額		266	17,550
責任準備金の増加額		21,485	2,834
受託金の増加額		19,236	20,268
貸倒引当金の増加額		△9	—
退職給付引当金の増加額		△5	8
賞与引当金の増加額		△1	1
価格変動準備金の増加額		0	△0
利息及び配当金収入		△9,271	△9,240
有価証券関係損益		△28	207
為替差損益		7,666	△6,280
不動産動産関係損益		0	2
その他資産(除く投資活動関連・財務活動関連)の増加額		△1,082	△1,048
その他負債(除く投資活動関連・財務活動関連)の増加額		406	459
その他		△4,085	5,585
小計		34,764	30,449
利息及び配当金の受取額		10,083	9,410
法人税等の支払額		△155	△103
営業活動によるキャッシュ・フロー		44,692	39,756
<b>II. 投資活動によるキャッシュ・フロー</b>			
預貯金の純増加額		△2,340	1,000
買入金銭債権の取得による支出		△23,483	△14,589
買入金銭債権の売却・償還による収入		19,987	20,287
金銭の信託の減少による収入		2,600	2,600
有価証券の取得による支出		△226,521	△333,388
有価証券の売却・償還による収入		183,118	285,744
II ①小計		△46,639	△38,345
(I + II ①)		(△1,947)	(1,410)
不動産及び動産の取得による支出		△4	△7
投資活動によるキャッシュ・フロー		△46,643	△38,352
<b>III. 財務活動によるキャッシュ・フロー</b>			
自己株式の取得による支出		△5	—
財務活動によるキャッシュ・フロー		△5	—
<b>IV. 現金及び現金同等物に係る換算差額</b>		—	—
<b>V. 現金及び現金同等物の増加額</b>		△1,957	1,403
<b>VI. 現金及び現金同等物期首残高</b>		17,693	15,736
<b>VII. 現金及び現金同等物期末残高</b>		15,736	17,140

注記事項

1. 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に記載されている科目の金額との関係

(単位：百万円)

	(平成16年3月31日現在)	(平成17年3月31日現在)
現金及び預貯金	44,066	28,470
コールローン	—	15,000
買入金銭債権	10,994	6,297
有価証券	682,285	734,046
預入期間が3ヶ月を超える預貯金	△28,330	△27,330
現金同等物以外の買入金銭債権	△10,994	△5,297
現金同等物以外の有価証券	△682,285	△734,046
現金及び現金同等物	15,736	17,140

2. II ①は、資産運用活動によるキャッシュ・フローをいいます。
3. (I + II ①)は、営業活動によるキャッシュ・フローと資産運用活動によるキャッシュ・フローの合計をいいます。
4. キャッシュ・フロー計算書における資金(現金及び現金同等物)は、手許現金、随時引き出し可能な預金および容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から満期日または償還日までの期間が3か月以内の定期預金等の短期投資からなっています。

(4) 利益処分

(単位：百万円)

科目	年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
当期末処分利益		494	512	522
次期繰越利益		494	512	522

(5) 1株当たりの配当等及び1人当たりの総資産額

(単位：百万円)

区分	年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
1株当たり配当金		—	—	—
1株当たり当期純利益		5.09円	8.90円	5.30円
配当性向		—	—	—
1株当たり純資産額		788.76円	794.04円	794.08円
従業員1人当たり総資産額		36,322	44,799	44,685

(注) 1. 1株当たり当期純利益は  $\frac{\text{当期純利益}}{\text{期中平均株数(加重平均)}}$  により算出しています。

2. 1株当たり情報の計算については、自己株式数を控除して算出しています。

3. 従業員1人当たり総資産額は  $\frac{\text{期末総資産}}{\text{期末従業員数}}$  により算出しています。

## 2 リスク管理債権

次の5項目については、該当するものではありません。

(1) 破綻先債権、(2) 延滞債権、(3) 3ヶ月以上延滞債権、(4) 貸付条件緩和債権、(5) リスク管理債権の合計額

## 3 債務者区分に基づいて区分された債権

次の4項目については、該当するものではありません。

(1) 破産更生債権およびこれらに準ずる債権、(2) 危険債権、(3) 要管理債権、(4) 正常債権

## 4 保険金等の支払能力の充実の状況(ソルベンシー・マージン比率)

(単位：百万円)

区分	年度	平成14年度末	平成15年度末	平成16年度末
(A)	ソルベンシー・マージン総額	348,426	364,308	359,908
	資本の部合計(社外流出予定額、繰延資産およびその他有価証券評価差額金を除く)	1,552	1,564	1,575
	価格変動準備金	0	0	0
	異常危険準備金	341,675	359,772	355,813
	一般貸倒引当金	9	-	-
	その他有価証券の評価差額(税効果控除前)	5,187	2,971	2,520
	土地の含み損益	-	-	-
	負債性資本調達手段等	-	-	-
	控除項目	-	-	-
	その他	-	-	-
(B)	リスクの合計額 $\sqrt{R1^2+(R2+R3)^2}+R4+R5$	395,357	395,324	394,964
	一般保険リスク相当額(R1)	-	-	-
	予定利率リスク相当額(R2)	-	-	-
	資産運用リスク相当額(R3)	7,575	7,543	7,190
	経営管理リスク相当額(R4)	7,752	7,751	7,744
	巨大災害リスク相当額(R5)	380,030	380,030	380,030
(C)	ソルベンシー・マージン比率 $[(A)/\{(B) \times 1/2\}] \times 100$	176.3%	184.3%	182.2%

(注) 上記の金額および数値は、保険業法施行規則第86条および第87条ならびに平成8年大蔵省告示第50号の規定にもとづいて算出しています。

### ソルベンシー・マージン比率とは

損害保険会社は、保険事故発生の際の保険金支払や積立型保険の満期返戻金支払等に備えて準備金を積み立てていますが、巨大災害の発生や、損害保険会社が保有する資産の大幅な価格下落等、通常の予測を超える危険が発生した場合でも、十分な支払能力を保持しておく必要があります。

この「通常の予測を超える危険」(上表の(B))に対する「損害保険会社が保有している資本・準備金等の支払余力」(上表の(A))の割合を示す指標として、保険業法等にもとづき計算されたのが、「ソルベンシー・マージン比率」(上表の(C))です。

「通常の予測を超える危険」(リスクの合計額)：①～⑤の総額

- ①保険引受上の危険： 保険事故の発生率等が通常の予測を超えることにより発生し得る危険(巨大災害に係る危険を除く)
- ②予定利率上の危険： 積立型保険について、実際の運用利回りが保険料算出時に予定した利回りを下回ることにより発生し得る危険
- ③資産運用上の危険： 保有する有価証券等の資産の価格が通常の予測を超えて変動することにより発生し得る危険等
- ④経営管理上の危険： 業務の運営上通常の予測を超えて発生し得る危険で上記①～③および⑤以外のもの
- ⑤巨大災害に係る危険： 通常の予測を超える巨大災害(関東大震災等)により発生し得る危険

「損害保険会社が有している資本・準備金等の支払余力」(ソルベンシー・マージン総額)

損害保険会社の資本、諸準備金(価格変動準備金・異常危険準備金等)、有価証券・土地の含み益の一部等の総額です。

ソルベンシー・マージン比率は、行政当局が保険会社を監督する際に、経営の健全性を判断するために活用する指標のひとつですが、その数値が200%以上であれば「保険金等の支払能力の充実の状況が適当である」とされています。

◎当社は、「地震保険に関する法律」にもとづき政府と地震保険再保険契約を締結しており、かつ同法に、政府は保険金支払のための資金のあっせん・融通に努める旨定めているなど特別の事業形態となっていることから、保険業法第132条第2項に規定する区分等を定める命令第3条第4項(注)により、当社のソルベンシー・マージン比率の数値は、上記水準の如何にかかわらず、行政当局が行う改善命令等の発動基準の数値としては使用しないことになっています。

(注) 条文は、次のとおりです。

「保険会社が地震保険に関する法律(昭和41年法律第73号)第3条第1項(政府の再保険)に規定する再保険契約を政府との間で締結している場合には、当該保険会社について、当該保険会社が該当する前条第1項の表の区分に応じた命令は、同表の非対象区分に掲げる命令とする。」

## 5 時価情報等(取得価額または契約価額、時価および評価損益)

### (1) 有価証券

#### ① その他有価証券で時価のあるもの

平成15年度末

(単位：百万円)

区 分	種 類	取得原価	貸借対照表計上額	差 額
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	公 社 債 式 株	408,420	413,531	5,110
	外 国 証 券	53,185	56,638	3,453
	そ の 他	1,500	1,509	9
	小 計	463,106	471,679	8,572
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	公 社 債 式 株	136,002	135,497	△504
	外 国 証 券	77,783	71,654	△6,129
	そ の 他	3,503	3,454	△48
	小 計	217,289	210,606	△6,683
合 計		680,396	682,285	1,889

平成16年度末

(単位：百万円)

区 分	種 類	取得原価	貸借対照表計上額	差 額
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	公 社 債 式 株	534,272	539,340	5,068
	外 国 証 券	115,555	120,974	5,419
	そ の 他	-	-	-
	小 計	649,827	660,315	10,487
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	公 社 債 式 株	22,005	21,984	△21
	外 国 証 券	49,057	45,345	△3,711
	そ の 他	6,510	6,401	△109
	小 計	77,573	73,731	△3,842
合 計		727,401	734,046	6,644

#### ② 当期に売却したその他有価証券

(単位：百万円)

種 類	平成15年度			平成16年度		
	売却額	売却益合計	売却損合計	売却額	売却益合計	売却損合計
その他有価証券	22,732	172	143	50,182	41	231

次の4項目については、該当するものはありません。

- ・ 売買目的有価証券
- ・ 満期保有目的の債券で時価のあるもの
- ・ 当期に売却した満期保有目的の債券
- ・ 時価のない有価証券の主な内容および貸借対照表計上額

### (2) 金銭の信託

(単位：百万円)

種 類	平成15年度末			平成16年度末		
	取得原価	貸借対照表計上額	差 額	取得原価	貸借対照表計上額	差 額
金 銭 の 信 託	11,600	11,794	194	9,000	9,173	173

### (3) デリバティブ取引情報

#### ① 取引の状況に関する事項

当社では外貨建資産に係る将来の為替相場の変動によるリスクをヘッジする目的で、為替予約取引、通貨オプション取引を行っているほか、債券に係る将来の金利変動リスクを軽減する目的で、債券店頭オプション取引を行っています。

当社が利用しているデリバティブ取引は相場の変動による市場リスクを有していますが、大部分は現物資産をヘッジする目的で行っているため、当該取引の損失のみが発生することはありません。また、一部購入予定の債券に関してオプション取引を利用する場合がありますが、量的制限を設けているため、リスクは限定的です。

取引先は信用度の高い金融機関であるため、契約不履行等の信用リスクはほとんどないと考えています。

当社のデリバティブ取引の状況は取引執行部門と分離したリスク管理部門がチェックし、定期的に常務会等へ報告しています。

#### ② 取引の時価等に関する事項

デリバティブ取引における「契約額等」は、あくまでもデリバティブ取引における名目的な契約額または計算上の想定元本であり、当該金額自体が、そのままデリバティブ取引に係る市場リスクや信用リスク等を表すものではありません。

#### ③ デリバティブ取引の契約額等、時価および評価損益

通貨関連

(単位：百万円)

区 分	種 類	平成15年度末			平成16年度末		
		契約額等 うち1年超	時価	評価損益	契約額等 うち1年超	時価	評価損益
市場取引以外の取引	為替予約取引						
	売 建 米 ド ル	63,030	6,266	2,393	58,274	20,078	△494
	ユ ー ロ	34,665	2,460	365	69,390	31,730	△2,308
合 計			2,758	2,758		△2,802	△2,802

(注) 時価の算定方法

為替予約取引……………為替相場は先物相場を使用しております。

債券関連

(単位：百万円)

区 分	種 類	平成15年度末			平成16年度末		
		契約額等 うち1年超	時価	評価損益	契約額等 うち1年超	時価	評価損益
市場取引以外の取引	債券店頭オプション取引						
	売 建 コ ー ル (オプションプレミアム)	-	-	-	5,000 (7)	-	16 △8
	合 計					-	△8

(注) 時価の算定方法はオプション価格計算モデル等によっております。

その他の時価情報等は、該当するものはありません。